

海外司法スケッチ フランス国立書記官学校

ブルゴーニュ地方ディジョン市



フランス国立書記官学校

パリから超特急TGVで1時間40分、中世の面影を残す古都ディジョン市には、主任書記官と書記官の養成をしている司法省所属のフランス国立書記官学校があります。



ディジョン市街

主任書記官や書記官の採用試験に合格した者は、ここで養成研修を受けた後、それぞれの職場に赴任することになります。2002年(平成14年)度の主任書記官養成研修には、80

人が参加し、その8割近くを女性が占めていました。

フランス国立書記官学校では、外国からの研修生も受け入れており、日本の裁判所からも、最近では2000年(平成12年)度と2002年(平成14年)度にそれぞれ1人ずつが派遣され、外国人研修生として主任書記官養成研修を受けました。

今回は、私が参加した主任書記官養成研修について紹介します。

この研修は、第1期学科研修(14週間)、実務研修(24週間)、第2期学科研修(5週間)、実務導入研修(5週間)からなっています。

学科研修には、裁判手続についての科目もありますが、人事や予算などの司法行政事務についての科目、プロジェクトの運営方法や職業面談技法などのマネジメント技法についての科目を中心に構成されています。各教室には、LAN設備が整備されていて、プレゼンテーション・ソフトを使った講義やパソコンのロールプレイング・ゲームを取り入れた演習科目など、工夫を凝らした授業も行われます。

研修生は、16人ずつの5グループに分かれ、授業はこのグループ単位で行われます。授業の開始時刻、終了時刻や昼食時間は決められていますが、休憩時間は決まっておらず、講義を担当する教官が授業の途中で、頃合いを見計らって小休止を入れます。

実務研修と実務導入研修は、実際にフランス各地の裁判所で主任書記官として執務をします。外国人研修生の実務研修は、ディジョン市内にある裁判所で行われます。

ディジョン市内には、かつての最高法院の建物をそのまま使っている控訴院と、1980年代に建築された大審裁判所、小審裁判所、労働裁判所、商業裁判所が入っている合同庁舎の二つの庁舎があります。執務室の多くが、個室又は数人で使用する部屋で、日本の多くの裁判所にみられるような大部屋の執務室はとともまれです。

フランスでは、主任書記官や書記官として採用されるためには、法廷で宣誓をしなければなりません。このため、研修中に宣誓式が開かれ、研修生は、法廷で法服を着用して宣誓をします。

主任書記官養成研修に参加して特に印象的だったことは、議論を重視しているということです。授業のほとんどが討議形式で行われ、常に理由を示しながら自分の主張を明確に説明することが求められます。組織運営には、明確な説明をすることが必要となるため、常にそ

の訓練をしているのだと思います。

(N. Y)



研修生ら(ディジョンの裁判所にて)

Pause-Café

旧ブルゴーニュ公国の首都で、芸術、料理、文化の中心都市として栄えたディジョン市は、現在もフランス中東部・ブルゴーニュ地方の中心地。旧ブルゴーニュ大公宮殿は、現在、西側が市庁舎、東側がフランドル派の作品を多く所蔵するディジョン美術館として使われている。



ブルゴーニュ地方



旧ブルゴーニュ大公宮殿

ディジョンの特産品と言えば、『エスカルゴ』(食用カタツムリ)とまろやかな辛さの『ディジョン・マスタード』(洋辛子)。どちらも美食王国フランスを代表する食材として知られている。そし

て、忘れてならないのが、ブルゴーニュ地方が世界に誇る『ブルゴーニュ・ワイン』。ボルドー地方とともに、『フランス・ワイン大銘醸地の双壁』と言われている。ディジョン市の南からポアヌ市周辺の地域は、『コート・ドール』(黄金の丘陵)と呼ばれ、ブルゴーニュ・ワイン最高峰クラスの赤と白のほとんどが、この地域で生産されている。



コート・ドールのブドウ畑